

**ご参加  
ありがとうございました**

9月の講座&バスツアー「いいじゃん！よこはま・かながわの食と農」は、のべ57名のご参加をいただき無事終了しました。

第一回の講座で地産地消の意義について学び、第二回は地モノ野菜を使っての郷土食や新メニューに挑戦、旬の味をたっぷり味わいました。

最終日はいよいよバスで市内の農の現場を訪ねるツアー。広大なさやべつ畑を見学したり、「大熊にここ市」の元気な女性農業者の皆さんと、手づくりのオール大熊地場産「ここ市膳」を味わいながらの交流会、若手後継者との交流など、めったにない貴重な体験に参加者のみなさんからは大満足との声をいただきました。

**4つの部活が立ち上がり  
りました！**

前号でお伝えした「NORAの部活」。さっそく活動が始まっています。

簡単・便利・安全で身体にいいこと&食を研究する『食とからだの研究所』、発酵を日々の暮らしに取り入れる『発酵部』、日本人にとって欠かせない「豆」について学び、ときには美味しい豆料理を食べる『豆部』、何を撮るのかまだ分らないが『映像部』。興味のある方はぜひ入部してください。

各部の情報交換は「部活メーリングリスト」で行っています。部員になろうか迷っている方は、メーリングリストへのおためし参加もOKですので、事務局までご連絡下さい。

**【食とからだの研究所】**

部長の埋橋さん（研ぎ師・食生活アドバイザー）を中心に定例活動をすでに3回実施。手打ちパスタ、豆乳プリンマンジェなどをつくりました。こんなに簡単だったのか！と、NORA周辺では、ちよつとした手打ちパスタブームがおこっています。

- ・定例活動日  
第2・第4金曜日の19時～21時
- ・活動内容  
①食の研究（NORA事務局にてみんなで作って食べます）  
②自分でできる身体のメンテナンス（自力整体やマッサージなどを試します）

『豆部』『発酵部』『映像部』の活動はこれから本格化する予定。詳細は、部活メーリングリストにて発信します。

**参加者募集！  
森づくりコーディネーター  
養成講座**

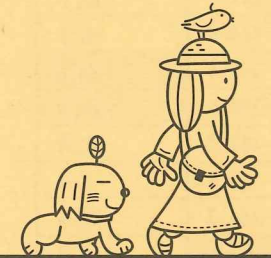
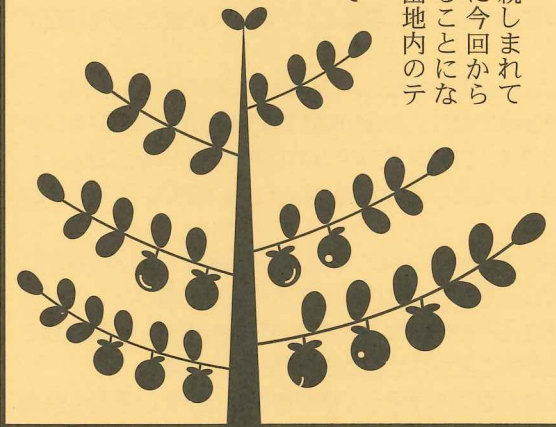
横浜では地域に残された緑地を市民が手入れする「森づくりボランティア活動」がたいへん盛んで

す。しかし森に関わる人が増えたことで森への接し方が多様化し、マイナスの影響も出始めています。またグループ内での合意形成の難しさも課題となっています。

そこで、NORAが培ったノウハウを活用して、「森づくりコーディネーター養成講座」を開講します。11月23日（祝）から来年1月26日（土）まで全6回の講座を通して、森を科学的に見る力、小規模緑地の森の現状をもとに将来の姿を描く力、グループ内で構想をまとめていく力、目標に向かうために具体的に計画する力、等を身に付けます。お問い合わせ・お申し込みは事務局まで。

**お知らせ  
「農と緑のふれあい祭り」**

- 11月3日（祝）10～15時
- 環境活動支援センター、こども植物園および児童遊園地（横浜市保土ヶ谷区）
- 毎年開催され市民に親しまれている「ふれあい祭り」に今回から環境活動団体も参加することになり、NORAは児童遊園地内のテントで「里山カフェ」、部活発表などを予定しています。
- 野菜、花、畜産物の即売や模擬店、各種イベントもあります。遊びにきてね！
- \*会場へはバスで、児童遊園地下車



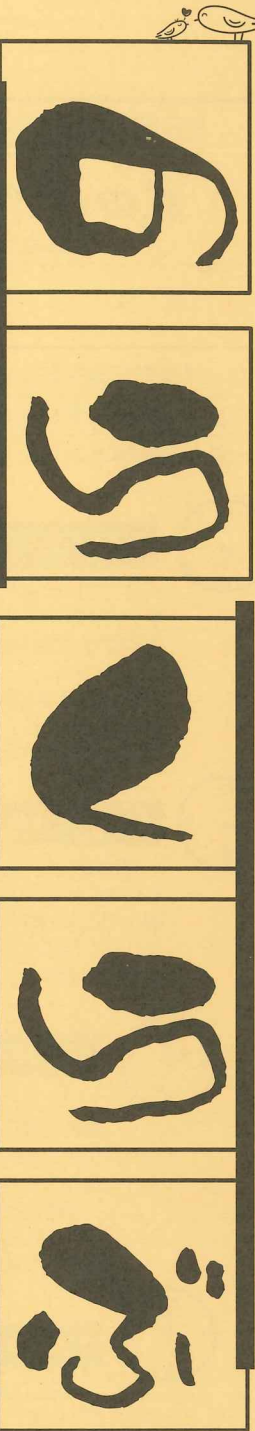
**のらくらぶ～秋の号 平成19年10月15日発行**

【発行・編集】  
特定非営利活動法人よこはま里山研究所～NORA  
のらくらぶ編集委員会  
〒232-0017 横浜市南区宿町2-40大和ビル119  
TEL 045-722-9674 FAX 045-722-9675  
http://www8.ocn.ne.jp/~satoyama/  
nora-y@estate.ocn.ne.jp

【NORA会員および年会費】  
運営(正)会員:12,000円  
一般(準)会員:3,000円  
賛助会員:個人一口10,000円、法人三口以上  
\*いずれも「のらくらぶ」送付・イベント割引など特典あり。  
郵便振替口座:00200-4-72504 よこはま里山研究所  
お問合せはNORA事務局まで。

## レッドデータブックから見た よこはまの里山

里山と暮らしをつなぐ



レッドデータブックは絶滅の恐れのある野生生物をリストアップしたもので、野生生物保護の基礎資料である。日本では1989年に最初のものが作られ、その後、10年ほどの間隔で改訂が繰り返されている。神奈川県でも1995年に最初のレッドデータブックが作られ、2006年に最新のデータで改訂が行われた。

これらのレッドデータブックにより、キキョウやメダカなど、里山に生育する生物の中にも絶滅の恐れのある生物が多数あることが明らかにされた。

2002年に出された新・生物多様性国家戦略では、生物多様性の3つの危機のひとつとして、自然に対する人間の働きかけが減っていくことによる危機をあげ、その代表的な例として里山の荒廃がとりあげられ、保全の必要性が提案された。

絶滅危惧種や希少種が集中して分布しているところをホットスポットという。丹沢の標高1000m以上の地域と箱根から奥湯河原にかけては、RDB種

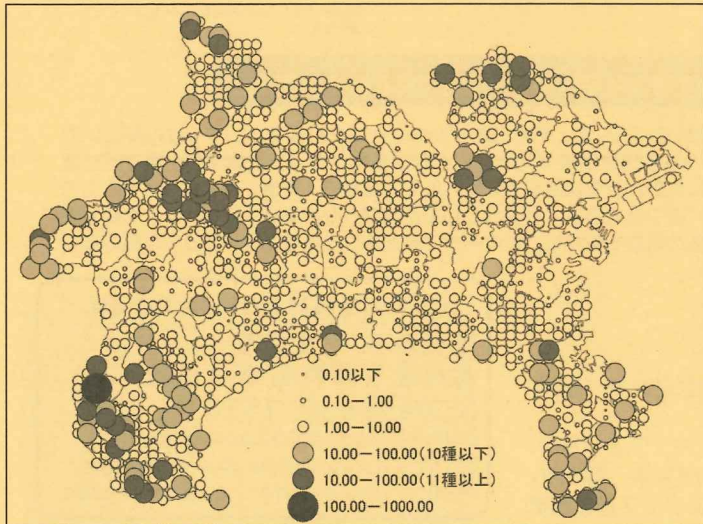
（レッドデータブックに掲載されている種）の出現頻度の高い場所が集中し、県内最大のホットスポットになっている。これはブナ帯に分布が限られる希少種が多数あるためである。次いで、県北の生藤山から陣場山にかけて、横浜市緑区から旭区にかけて、登戸周辺、逗子から葉山にかけて、三浦半島の海岸線などにもホットスポットが存在する。

緑区から旭区にかけてと登戸周辺のホットスポットの存在は、この地域の里山に絶滅危惧種や希少種が多い（多かつた）ことを示している。緑区から旭区にかけては、NORAと関わりが深い新治市民の森や三保市民の森など、横浜市北部の拠点緑地がある。この地域の里山の保全は神奈川の生物多様性の保全にとって重要といえる。

緑区から旭区にかけて記録のあるRDB種は66種あるが、そのうち28種は湿地性、16種は草地性の種で、全体の3分の2を占める。神奈川県内には湿原といえるような大きな湿地は箱根仙石原に限られ、火入れや放

牧で維持されてきたような大規模な草原もない。谷戸奥の湧水と湿地、谷戸田、ため池など、里山の水辺環境は湿地性の種の貴重な生育地である。新治市民の森では大半の水田が畑地化されてしまったが、湿地性種の生育環境を確保するために水田の再生が望まれる。また、水田と背後の丘陵との間の土手は定期的に草刈が行われ、細長い草地として維持されてきた。特に北向き斜面は雑木林により水田が日陰にならないように、幅広く草地になっていた。このような小規模な草地を里草地というが、ここは草地性の貴重な生育環境である。

横浜の里山は大都市という海の中の孤島のようなものである。かろうじて生き残ったRDB種の多くは、すでにその生育基盤が失われて



神奈川県内の植物のホットスポット（神奈川県レッドデータ生物報告書2006より）  
●印が重なっているところがホットスポットにあたる。

いるかもしれない。適切なゾーニングとモニタリングにより、きめ細かい里山管理を行い、できるだけ多くのRDB種が生き残れるような環境を維持したいものである。

理事 勝山 輝男  
(生命の星・地球博物館学芸員)

今日のNORAびとは

なり た しん じ  
**成田信治さん**  
(三宅島在住)

# 新しい緑の産業をつかって 島の復興に役立ちたいんです。

「三宅に緑を取り戻したい!」。以前、NORAの山仕事を手伝ってくれていた成田さん(1982年生、平塚農業高校出身)は、復興の仕事にかかわりたいと、2004年、単身三宅島に渡った。今は緑化事業を行う(株)伊豆緑産で、現場のまとめ役として日々の仕事をこなしながら、新規事業の企画や営業にも取り組んでいる。



## 7:30...スタッフ十数人の仕事が成田さんの朝礼で始まった

「ここでは前例がない事ばかり。だから自分のアイデアも取り入れてもらえるんです」。神奈川で造園と林業の経験がある成田さん。島に来て最初の2年間は、緑化の最前線(独)森林総合研究所の研究者と共に、どうやったら緑が戻るのか試行錯誤を繰り返した。  
「普通は仕事を請け負ったらただこなすだけ。うちは三宅の将来を考えいろんな提案をしています」。植樹する苗木は在来種の利用を主張。枯れ木の処理方法について勉強会なども開催する。



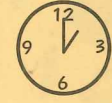
## 8:30...いまも火山ガスが立ち込める枯木の伐採現場へ

「雨が降るたびに大量の土砂が流れ出して山が崩れるんですよ。山に木が無いというのがこんなに恐ろしい事だとは思いませんでした」。三宅島の植生は2000年の噴火で約半分が失われた。活火山である雄山の周辺には立ち枯れた木々が延々と続く。「今日はガスが濃いですねえ、しゃっくりが止まりません」。人手が足りないときは現場作業にも携わる。



## 10:00...新規事業としてサルトリイバラを栽培する農場へ

「火山ガスでほとんどの植物は枯れますが、サルトリイバラだけは元気なんです。これで緑化をしながら、新しい仕事もつくれたら一石二鳥だと思ったんです」。切花としての出荷を目指して、耕作放棄された畑を借り栽培を始めている。秋に赤い実がつくサルトリイバラはクリスマスリースの材料として人気だ。  
「緑化は行政からの委託事業がほとんど。でも緑化をしながらお金も生み出せる産業をつくらないと、人は定着しないし島の復興にはつながらない」。彼の思いを社長も受け止め、事業を全面的に任されている。



## 13:00...事務所 現場スタッフが戻るまで仕事はたくさんある

「切花の出荷先の開拓も必要だし、新しいアイデアも試したい。やることは山ほどあります。初めての事ばかりなので我ががパイオニア、そこが面白いんですよ」。噴火した三宅でしか見られない自然がたくさんある。それを利用してエコツアーをやりたいと、三宅島の自然ガイドを育成する講座にも通う。またサルトリイバラの葉で染めたTシャツの販売も手がける。サルトリイバラの花言葉は「不屈の精神」。復興のシンボルにしたいと彼は言う。



自作の五右衛門風呂



## 19:00...仕事を終え自宅へ 満点の星空のもと五右衛門風呂

「田舎暮らしに慣れていました。もちろん大変なことはありますが、やっぱり楽しいですねえ」。彼が暮らす古民家は築100年。この日は取材スタッフを歓迎し、庭で五右衛門風呂を沸かしてくれた。夕食は島の人の差入れて、特産の「里芋」、サツマイモともち米をついて揚げた「さつまもち」、ちょっとした苦味がクセになる「苦っ竹」。七輪で焼いた新鮮なサバと島の焼酎も絶品だ。行く先々で声をかけられるほど、すっかり島になじんでいる。

## レポーターのひとこと

成田さんは、林業でもなく、農業でもない、森を活かす仕事(彼はそれを「森林産業」と呼ぶ)をつくり、三宅の自然を再生しようとしています。噴火で失われた植生、歩いて観察できる植生遷移の様子、海のアクティビティなど、三宅の資源をどう盛り込めば魅力的なエコツアーになるか研究中。島外の人々の声を聞くためモニターツアーをぜひ実施したいとの事でした。(スタッフ 前田朋英)



見渡す限りガスで枯れた木が並び



サルトリイバラ事業は林野庁の優秀プランに認定された



サルトリイバラで染めたTシャツのデザイン

三宅島復興商品などのお問合せは  
株式会社 伊豆緑産  
森林産業部 部長 成田信治  
TEL: 04994-6-1510  
izuryokusan@abelia.ocn.ne.jp  
http://www5.ocn.ne.jp/~ryokusan/  
http://www.rakuten.co.jp/ryokusan/



# トマトたっぷり！ 「手前パスタ」で 「じゃれまます」!

「手前」 前味噌という言葉がありまして。自分で作った味噌を「うちで作ったお味噌が一番美味しいんですよ」と人に振る舞うという所から「自慢する」の意ですが、私は自分の手から生み出した味噌を美味しいわよ!と云って振る舞えるのってステキ!と思うので、あまり「自慢」という訳は好きではないのですが、でも最近はお味噌を手作りするという話も珍しくなりましたね。

「お」 店に行けば「手作りの風や無添加の食べ物色々並んでいる。楽「便利」をお金で買える時代。そのおかげで助かっている人もいます(私もそう)。でも生活の中ちよっとした手間を惜しまないことも時には必要!それを、a o h aさんの「手打ちパスタ教室」から学びました。

「ハ」 スタマシーン?特別な道具?いりません!粉に卵と水とオリーフオイルを合わせたものを入れて、あとは手わざ、そして手加減。キュッキュッキュ!だと生地が切れてしまうので、小気味よくキュッキュ!と手際よく粉をまわす。グルーブに分かれてこねてみだけれど、みんな生地の具合が違ってくる!そのままだと、ロール袋に入れて30分オヤスマナサイ。

「丸」 丸として真っ赤なトマトやタマネギ、ニンニク、ベーコンで作ったおいたマトソースもいい感じに煮えてきた。デザー

「ト」 トモパスタを休ませている間に準備完了!すごい!みんなの手から、美味しいものがどんどん生まれていく!

「ハ」 スタを伸ばす時も、四角く伸ばしているつもりなのに、段々丸くなっていく個性が出ます。生地に打ち粉をしてたんで3ミリ幅に切る。それぞれの皿に切った生パスタを乗せ、鍋の前で待つ。ゆでる時間はたった40秒!

「ゆ」 たてを皿に盛り、グルタミン酸の旨みたっぷりのトマトソースをかけ、パルミジャーノをざっと振り、熱いうちにいただく。「うわ!美味しい!」「あたしの打った麺、すこいモチモチしてるよ!」ちよっと太かったけど、これも味があっていいね!みんなステキな「手前パスタ」だ!

「キ」 ャッと味が凝縮されたトマトの出ず甘みと酸味の合わせ技。調味料はほとんど入れなかったけれどすべての野菜が鍋の中で手をつないでタッグを組んだこの味。こういう瞬間に、野菜を作ってくれた農家の方に感謝!匂いをただける事に感謝!こういう味を振る舞えたら、なんて幸せな食卓になることだろう!

「そ」 んな時、この一言を忘れずに...「手前パスタ」でございませう、召し上がれ! (食とからだの研究部 部長 K)

## N O R A レポ ー ト 生命育む緑は守れるのか? 「緑被率30%確保」の真実!?

「緑の面積」推移 (ha)

	75→04年	92→04年
鶴見	-149.6	-25.9
神奈川	-94.5	-13.8
西	17.8	16.0
中	-46.2	9.4
南	-227.9	-22.7
港南	-173.9	-6.2
保土ヶ谷	-166.4	-34.6
旭	-210.6	-39.3
瀬谷	-162.1	-42.8
磯子	-183.5	-7.6
金沢	-244.7	-37.6
港北	両区で	-235.3
緑	-3076.4	-200.8
都筑	38.7	38.7
青葉	-164.4	-164.4
戸塚	-494.8	-113.8
栄	-61.7	9.3
泉	-249.7	-113.1
全市	-5649.9	-984.5

・92年分区  
・92年分区  
・86年分区  
・86年分区

緑被率とは、上空から航空写真を撮り、緑に覆われて見えている割合のことだ。樹林地だけではなく農地や草地、街路樹だって含まれている。横浜市の緑被率は減り続けて04年度で31%、目標としている「緑被率30%確保」が危ぶまれている。  
その「緑被率」を区ごとに面積へ換算し、04年から30年前・12年前と比べてみた(左表)。市全体では、この30年間で5649.9haもの緑を喪失...。これは市面積の13%、日産スタジアムのなんと828コ分に相当する。とくに緑区・港北区の2区だけで3076.4haも失われているのだ(分区前から積算)。  
ところが、この12年間にわずかに増えた4区がある。西区・中区は埋め立てにより区の面積が拡大し、そこに植えられた樹木が大きく育ったことが思い当たる。都筑区は港北ニュータウンの大規模開発が落ち着いた、当時植栽された緑の成長や、造成地が草に覆われたことなどが推察できる。  
フシギなのが栄区。山の斜面の木が育って枝が張り出したり、宅地化後の植栽・街路樹などが大きくなった、ということだろうか?しかし栄区も05年以降、本郷駅前の森が消滅し、瀬上の谷戸には26haもの開発計画がある。旧緑区・旧港北区の主たるデベロッパーがそれを動かしている。次の緑被率調査では大幅な減少が危惧される。  
長い年月をかけて育まれた緑には、かけがえのない生命のつながりや、人と自然とのかかわりの歴史が刻まれている。埋立地の緑化や街路樹として植えられた緑では補完しがたい価値なのだ。造成地や埋立地の緑だけを増やして「緑被率30%確保」を謳う方向へは行かないでほしい。

※分区したところはその年との比較